

生きものの豊かな水辺づくり ～都市部での取り組み～

佐藤方博・片岡友美（認定NPO 法人 生態工房）

東京都練馬区には、かつて台地の切れ目に湧水池や河川、水田などが広がり、豊かな水辺が各地に形成されていた。しかし近年は市街地が拡大し、水域の埋め立てや河川の暗渠化で水辺が消滅したり、湧水量の激減によって水辺環境が悪化していった。現在この地域では、公園の池と暗渠化を免れた川がわずかな水辺として残っている状況である。このような地域で水辺の生物を保全するには、孤立化した現存の生息地を保全するだけでなく、新たに水辺を創出して生息地を増やすことが必要である。

都立光が丘公園バードサンクチュアリは1985年に開設した造成型ビオトープである。演者らは当地で武蔵野台地における生物相の回復を目指し、在来生物の保全や生息環境の管理を行っている。この活動の一環として当地では外来生物の防除を行い、これまでにオオクチバスやコイなどの大型外来魚類を根絶した。さらに2009年からは「外来魚のいない水辺づくり」をテーマに、外来生物の防除と多様な在来生物が生息できる環境整備に取り組んだ。

生息環境の整備

ニホンアカガエル、ヤブヤンマなどの東京都レッドリスト選定種を保全するために、産卵場所として水たまり状の池を整備した。また池水の循環と、ハグロトンボなどの流水性の生物の保全のために細流を整備した。これらには水田魚道などに利用されている太陽光発電と小型ポンプによる小規模な揚水システムを用いた。さらに、小魚やイトトンボ類の生息環境として沈水・浮葉植物帯を整備した。過去に生育していた群落がアメリカザリガニの増加によって消滅しているため、その再生が待たれる。

外来水生生物の防除

ミシシippアカミミガメ、ウシガエル、ブルーギル、アメリカザリガニなどを遮光型カゴ網（アイカゴ）、張網、カニカゴ等によって捕獲した。アカミミガメやウシガエルのワナあたり捕獲数は2006年以降から駆除によって減少したが、2011年までにこれらの種を根絶させるには至らなかった。ブルーギルは2008年にアイカゴを導入したため、2009年のワナあたり捕獲数が激減した。しかし、その後も駆除を継続したが2011年までに大きな減少はなかった。アメリカザリガニは2006年以降、徐々にワナあたり捕獲数が減少した。しかし、2011年までに減少幅は小さく捕獲数に大きな変化はみられなかった。これらの外来種は駆除によって2006年から減少傾向にあるが、アカミミガメ以外の外来種は低密度で個体群を維持している可能性が高いと考えられた。今後はワナ数や捕獲回数を増やすだけでなく、各種を対象とした低密

度条件に効果的な防除手法の導入を検討する必要があると思われた。